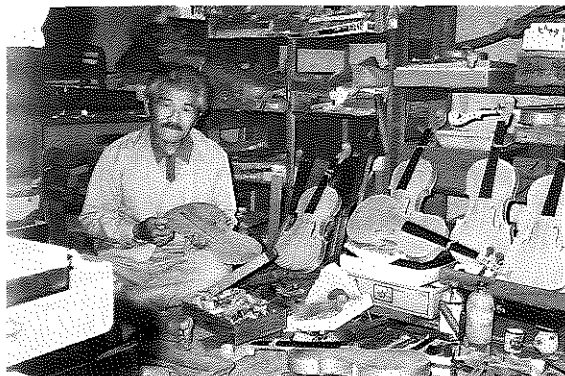
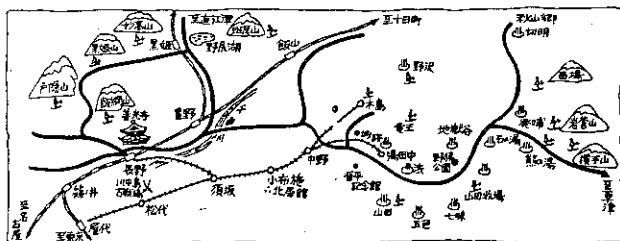


# 名人に聴く

10月30日、東京を発った時にはどんよりとした空も、長野駅から延々と続くアップルロードを走る頃には、さわやかな秋晴れとなった。『名人に聴く』第2回は、村杉 弘先生(当協会理事、信州大学教授)に御案内戴き、長野県中野市に住む、ヴァイオリン作りの名人、小沢信久二氏をたずねた。



表板裏側のカ木を説明しているところ



大正5年3月5日、長野県中野市竹原に生まれる。中野市立平岡尋常高等小学校卒。子供の頃は、音楽と工作が成績も良く得意だった。15才より楽器に関心をもち、ヴァイオリン作りを始める。最初は鈴木ヴァイオリンの修理を手がけ、18才で最初のヴァイオリンを完成。24才の時、金沢市の陸軍第四十九部隊に衛生兵として入隊。満州国牡丹江の部隊に配属され、丸3年間過ごす。その後前方に転属して終戦を迎えた。終戦後は捕虜となつて昭和21年4月帰国した。

## 「小沢信久二氏」



### りんごの里 長野県中野市

中野市は、長野駅から車で1時間程の東北に位置している。「しゃぼん玉」や「カチューシャの唄」等数々の名曲を生み、「日本のフォスター」とたたえられた中山晋平のふるさとであり、昭和62年、生誕100年を記念して「中山晋平記念館」を建てた町としても知られている。(160号「わがまち・わが支部」長野県東北信支部参照) また、土びなの里としても有名。中野の土びなは、京都伏見系と愛知三河系の二種類があるといわれ、いずれも素朴な土の香りが全国的に知られている。

その中野に生まれ育った小沢氏は、

農業の傍らヴァイオリンを作り続けている。



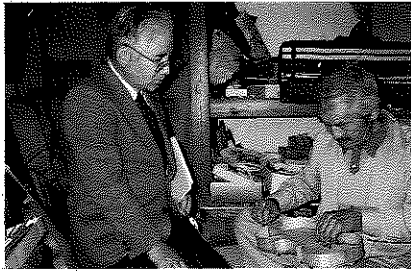
### 満州国での生活

まず、小沢氏がストラディヴァリを知るきっかけとなったのは満州国での生活からだという。

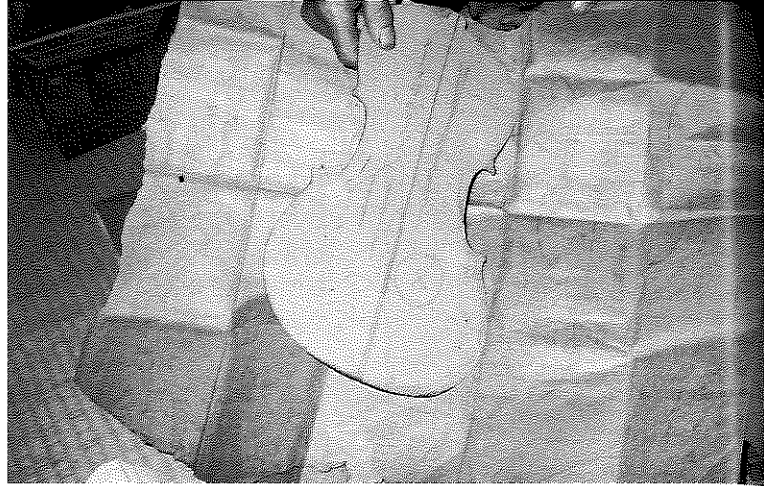
小沢氏は25才(S. 16 8月)に満州国牡丹江興隆鎮の衛生隊に配属されたが、2年間外出禁止の生活を送っていた。S. 18年5月、ようやく4人1組での外出許可が出た。

6月のある日、戦友と外出していた小沢氏の耳に、素晴らしいヴァイオリンの音が飛び込んできた。ただのヴァイオリンではないと思った。

次の日曜日、戦友に口止め料とし



魂柱の位置を説明しているところ



持ち帰ったストラディヴァリの型紙

て1円ずつ（当時1円で相当量のお酒が飲めたようだ）を渡し、2人の見張りをつけて、その音の主を訪ねた。玄関のドアをノックすると、朝鮮人の可愛いお手伝いさんが出てきた。音の主は、アレキサンドル・レンスキーという白髪の白系ロシア人であった。意を決してヴァイオリンを見せて欲しいと頼んだところ、しばらく考えていたが、「兵隊さん、どうぞ」と家の中へ招いてくれた。「兵隊さん、この楽器わかりますか？」と聞かれ、書いてある言葉はイタリア語らしかったので分からなかったが、以前「音楽講座」で見たストラディヴァリに確かに似ていたので、「これはストラディヴァリの名器だ」と言ったところ、レンスキー氏に「兵隊さんエライ！」と大変喜ばれ握手された。

アレキサンドル・レンスキー氏は当時60才。キエフのニコライ二世の皇室管弦楽団のコンサート・マスタを勤めていたヴァイオリニストで、ニコライ2世の依頼でクレモナへ行き、ストラディヴァリの名器を手に入れてきた人である。彼がイタリアから帰ってまもなくレーニンの革命（大正10年）が起り、奥様と子供1人を連れて1カ月間の逃亡の末、ハルピンを経て、牡丹江に住むようになったそうだ。

彼の美しいヴァイオリンの音に魅せられた小沢氏は、その日から牡丹江を離れるまで17~18回、彼の家を訪ねて、ヴァイオリンを聴かせてもらった。

S.19 6月、小沢氏に南方行の命

令が出た。彼は紙を盗みだし、レンスキー氏の元へ是非ストラディヴァリの型をとらせて欲しいと頼みに行った。「兵隊さん、どこかへ行ってしまいませんか」と聞かれたが、知られたら大変なので理由も言えず、3日間通い続け、やっと型をとらせてもらった。本物のストラディヴァリの型をとって、他へ売却されたら大変とでも思ったのだろう。

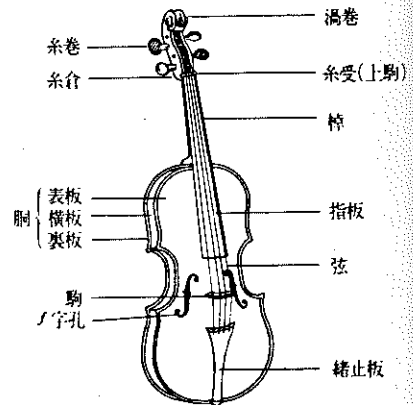
それから1週間後に牡丹江を出発、沖縄、台湾、フィリピンと渡り歩き、小沢氏は2度とレンスキー氏に会うことはなかった。やっと手に入れた型紙を小さく折りたたみ、セロファンにしっかりと包み、軍服のポケットに入れ、日本に帰るまでの3年間、肌身離さず持ち歩いた。

帰国後、秘密裡に持ち帰った型紙と、材質・各部の厚み等、実際に見た記憶を頼りに、今日まで農業のかたわらヴァイオリン作りに励んで60余年が過ぎた。



### 小沢氏が語る ストラディヴァリの秘密

音がきれいで澄んでいて、遠くまで聞こえる。この秘密を説き明かすのに小沢氏も相当苦しんだようである。とても語り尽くせないが、大き



なポイントは次に集約されるという。

- ①材料の木は、真ぐずたたき割れるものでなければならない。
- ②材料の木は、上下どこからでもカンナがかかるものでなければならない。

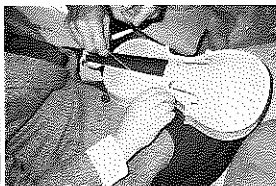
ヴァイオリンの材料となる木は、表板・横板・竿に楓やもみじが使われ、裏板に松（とど松・紅松）が使われる。小沢氏は自ら山へ入り、木を割って、その割れ具合を確かめてすじのいい木を手に入れている。そして、たたき割った面を傾けて反射木目を見ることによって、カンナがかかる所とかからない所がはっきりと分かるそうだ。楓には丸や楕円の細胞が並んでいて、無理をしてカンナをかけると、細胞はカンナでまっぶたつにされてしまう。そうすると、音がヴァイオリンの内部で反射するときに、すべてが反射せず、10のうち3・4が木の重なり目に吸収されてしまう。そのような楽器は、どんなに良い糸をつけてもダメなのだそうだ。また彼は、材料を叩いてみた時の



f字孔から覗いて魂柱を立てる



裏板に小沢氏独特の模様が彫ってある



象眼の位置を説明しているところ

音でも判断する。良い材料は、どこを叩いても同じ響きがする。材質によって音も違い、派手な音、こもった音、それだけで出来上がった時の音が想像できるそうだ。良いものと悪いものと実際に小沢氏が叩いて下さったが、なるほど、同じ板切れに見えるが響き方が全然違う。木目と叩いてみた時の音だけで判断する、“材料を見抜く力”は長年培われてきた勘によるという。

材料の他にヴァイオリンの音に重要な影響を与えるものとして、魂柱(こんちゅう)と力木(ちからぎ)があるという。魂柱は、駒の右足わずか後方、表板と裏板の間に固定される小さな棒のことで、表板の振動を魂柱を通して裏側に伝え、種々の振動部分をお互いに適合させる役割を持っている。魂柱は立てる位置がとても難しい。小沢氏はすべて組み立ててしまってから、f字孔から歯医者を使う先端に丸い鏡のついた棒で覗いて立てるのだそうだ。糊はいっさい使わずに立てるだけなので、長すぎたり、短すぎたりほんの少しの狂いも許されない。

一方力木は、表板の裏側に縦に3分の2の長さにわたって貼り付けられた肋材で、駒の左足から伝わってくる振動を表板全体に伝える働きがある。力木の役割は、アーチのたわむのを防ぐことと、低音の響きに丸みを持たせることだそうだ。魂柱も力木も直ちに音質に影響するものなので、綿密な計算と加工が必要になるという。

また、小沢氏が手をかけて作っているもうひとつのものに、象眼(ぞうがん)がある。象眼は、表板と裏

割を果たして、演奏時や気温の差で楽器が膨張したり縮んだりするのを防いでいる。象眼には、単に彫り込んであるものと、彫った所に木を3本張り合わせて埋め込んだものと、1本だけ埋め込んだものの3種類ある。楽器店の店頭で並んでいるヴァイオリンの中には、ただ飾りのように書いただけの象眼もあるそうで、それがかなりの値段で売られているとのこと。今度見てみると面白いかもしれない。小沢氏は、一番手間のかかる3本張り合わせた手法をとっている。3本のうち、真ん中に“えす”という黒い木を使い、彫った所にニカワを流し込んで、曲げながらはめこんでいく。ニカワとは、動物の皮・骨・筋・腸などを煮た液を固めた接着剤のこと。今のニカワは馬、豚、イルカ等ありとあらゆる骨が一緒になっているが、小沢氏の使うニカワは、牛の骨だけを使った純粋なものであるという徹底ぶり。

ニスについては、いろいろと議論が多いが、小沢氏は輪島塗りの漆を使っている。これは磨けば磨く程色が良くなり、絶対に白くならないのだそうだ。

工場で作られたヴァイオリンは左右がまったく同じ寸法にできている。板の縁に刻まれているもので、単に装飾の為と思いがちだが、重要な役この場合、内部での音の反射はみな同じ角度になる。一方、1本1本手で作られたヴァイオリンは左右が微妙に違う。内部での反射のずれ加減も音に影響してくるのだそうだ。微妙な話だが、確かになるほどと思う。

小沢氏が試行錯誤を重ね、長年の経験から得たものは、まだまだこん

なものではない。この限られたスペースでそれを語り尽くすのはとうてい無理なことである。こうして作られたヴァイオリンを手にした学生達は目の色が変わるといふ。奏法の難しいフラジヨレット・トーンズが容易に出るので大変驚くのだそうだ。

また、あごをのせる台も1人1人型をとって、その人のあごの型にあったものを作っているという。

だいたい1年間に8~10丁作る。最近NHKの“関東甲信越小さな旅”でも紹介されたために、訪ねてくる人も多くなったそうである。希望があれば、PTNAの方々にもおわけ下さるそうだ。最初から最後まですべて手作りのヴァイオリンにしては、それは驚く程安い値段なのである。

最後に実際に音を聴かせて頂いた。私はヴァイオリンが弾けないのでもって残念だったが、小沢氏が自ら弾いて下さった。それは、迫力のある音だった。ヴァイオリン全体が良く鳴っているという感じだった。今までヴァイオリンは繊細でどちらかかという、か細いイメージがあったのだが、その音は、響きに太い流れがあった。決して派手ではないが、深みのある、語りかけるような音だった。

ヴァイオリンは古くなればなるほど音が冴えてくるという。「良い材料で作ったヴァイオリンは、ますます音が冴えてくるが、そうでないものは、何年弾いても、どんなにいい糸をつけてもダメ」と小沢氏は断言する。そう言い切る彼に一徹な職人気質を伺い知るとともに、あたかも修道僧にも似た真摯な求道の姿が見られた。